

# 被害と加害の歴史に目を

## 平岡敬・元広島市長が講演



講演後も学生の質問に答える平岡敬さん

# 「弱きを助ける」報道人に脅迫に屈せず「平和宣言」

## 「ジャーナリストを指す日韓学生フォーラム」の備して、平岡敬・元広島市長が8月7日、広島市留学生会館で講演した。学生らに「弱きを助け、強きをじく精神がシャーンとして必要

だ」と呼び掛けた。平岡氏は中国新聞の記者時代に、困難する韓国入被爆者の問題を取上げ、見放された人々のルポを執筆。その経験を踏まえて「大陸進出の軍事拠点だった広島は、原爆の被害者であると同時に、アジアに対する加害者でもあった。そのことを自覚していくことが大事

だ」と強調した講演内容は次の通り。8面参照。  
植民地体験から  
先日の朝日新聞に「ボクシングならば叩たたけるマスメディア」という川柳が載った。ケサツと刺さった。ボクシング問題はやるのに、政治家がらみのスキヤンダルをマスコミはたげない。自分ならば、やるか。決意が試される。その覚悟を持ってジャーナリストを目指してほしい。

私は小学生時代を大阪史観を形作ったのはこう

した植民地体験だ。大学卒業後、広島の中新聞の記者になった。1985年春、編集局長から一通の手紙を渡された。韓国の被爆者が「助けてくれ」と訴えていた。筆出人は44年に広島商業学校を卒業した人だった。父親の防空壕工事を手伝っていた時に原爆が投下された。被爆後に韓国に帰ったが、10年前から妻子が隠くなり、2年前から馬山の国立病院に入院している。ぜひ日本で治療を受けたいと書いてあった。

広島原爆の死者は45年未だに14万人に上った。そのうち韓国・朝鮮人の死者は推定で1万から2万人とみられている。被爆後に朝鮮半島に帰った人の数はわからない。手紙を受けて韓国で取材した。9人の被爆者と会った。ソウル市内を流れる清溪川は釜川状態だ。その川沿いに猪房と呼ぶバラックが密集し、被爆者らが住んでいた。しつこく書いた

91年に広島市長になった。94年のアジア大会を成功させることが最も大きな仕事だった。アジアの人の心の中には、広島と長崎に原爆が落ちて、日本軍国主義が倒れ、よかったという感情がある。だから戦争と植民地支配をどう市長は考えているか、すぐに8月6日の「平和宣言」で、大きな苦しみ、悲しみを与え、申し訳ないと表明した。ものすごい反発があった。「殺すぞ」の脅迫も。天皇の戦争責任に触れたため、90年に本島長岡市長が銃撃される事件があったばかりで、私も生命の危険を感じたが、まあ、撃たれるなら、撃たれてもいいや、という気持ちだった。その後、92年、93年と続けて平和宣言に「しつこく、アジアの人たちへの反省を書いた。アジア大会は成功した。

須貝道雄

# 式典取材し 中国新聞を訪問

8月6日の広島。地元の人に言わせると、今年のは特別いいとのこと。その暑さの中、私たちは広島で様々な声を聞き、そして帰った。「私たちが」とは、2回目を迎えた日韓学生フォーラムに参加した学生30人余りと、実行委員で同行したメディアの記者の5人。約50人のこと。ジャーナリストを自指す日韓の学生に、いろいろな現場を見てもらい、相互交流を図る企画だ。

## 空虚な首相挨拶

5日から3泊4日、学生たちは広島市内のグストハウスで、合宿した。戦後73年の原爆の日、原爆ドームに近い平和記念公園に向かった。平和記念式典。朝から立っているだけで汗が吹き出す。私は会場には入れず、公園の一角でスピーカーから安倍首相の挨拶を聞いた。

昨年の夏、国連で核兵器禁止条約が採択されたこと、さらに秋にICANNがノーベル平和賞を受賞したこと、いずれも被災地・広島の人々にとってはかけがえのない出来事であるはずだ。だが、安倍首相は一言も言及しなかった。

# 原爆と報道を考える場に

## 日韓学生フォーラム 広島市で開催



韓国人被爆者慰霊碑前で語り部の話を聞く韓国の学生たち 6日、広島市

は、私が広島で聞いた声の中で最も空虚なものだった。この空虚さ、一瞬途方に暮れた。原爆投下の悲惨さをどう伝え、核廃絶の声をどう国内外に広げていったらいいのか。問いが頭の中をめぐった。

6日午後、中国新聞本社を訪問し、これらの問題と長年、格闘してきたジャーナリストの話を学生たちと一緒に聞いた。話し手は同紙の江藤剛典特別編集委員だ。紙面づくりが一年でも最も忙しい日であるにもかかわらず、快く時間を割いてくれた。福島の原発もできた。

## 新しい発見ある

江藤氏は、広島には原爆の体験が根づいていること、同時に日韓の暮らしと被爆体験が違ってきた。

「いることを指摘した。広島を被爆者としてとらえるだけでなく、戦争で亡くなった日本人の加害責任についても。被爆者に加害責任を語ってはおろかとは思わない。広島はまさに被爆者の声を伝えるのが役割だ」と語った。

飛び入りで、この場に参加したのは朝日新聞OBで、原爆報道に長年関わってきた岩垂弘さんだ。岩垂さんは「毎年8月6日は広島に立つことを決意して実行してきた。『原爆の問題は根が深く、まだほとんど知られていない。広島を49回訪れても新しい発見がある』と話した。

7日は、元広島市長の平岡さんに講演してもらった。2面書照。中国新聞の記者時代に韓国人被爆者問題に取り組み、埋もれた被害を世にアピールした。この講演会は学生のほか、地元市民も参加できる日韓フォーラム独自の企画として開いた。

平岡さんは90歳を超えても、その内面から発するバイタリティーに圧倒される。ソフトな語り口に、思わず引き込まれてしまう。「記者をつき動かしているのは、社会の不正義への怒りだ。そして弱者の立場に立つことが欠かせない。その一つが私にとって韓国人被爆者問題だった」と振り返

教師と子どもの碑の前で 6日、広島市

平岡さんは取材を通して韓国人被爆者の支援運動に関わっていく。迷いながらの行動だった。「ジャーナリストは当事者になつてはならない鉄則がある。その鉄則を踏み外して支援運動に加わった。でもそれは人間として許されるのではないか」

今でも平岡さんの自問は続くという。

学生たちは講演後も、昼食を一緒に取りながら、平岡さんを囲んで質問攻めに。平岡さんは「何のためにジャーナリストになるかが問われる。何でもいから、自分はこのういことをやるために記者になる、ということこそ大事にしてほしい」と学生たちに助言した。

教師の像に感動

フォーラムの最後は、参加者が一番感動を受けたことを、スマホで撮影した写真を前に掲げる「マイベストショット」の時

間だ。学生たちは未明まで語り、交流を深めた。その声をいくつかが紹介したい。

広島県出身の女子学生は、平和記念式典の会場で黙とうの際、そのとき父親の遺影を取り出す男性を見た。聞くに被爆2世で、今は語り部の伝承者として活動をしているという。その姿を見て「大切な人を忘れないように」と語り、涙を流した。

ジャーナリストになった「一緒に流した仲間と同じ方向を向いて行けたなら、少し淡い希望を感じ、少し幸せな気持ちになった」と話した。

広島での体験は学生たちの糧になっていくに違いない。昨年11月にソウルで初めて聞いたジャーナリストを自指す日韓学生フォーラムはまた一つ、大きな収穫を得た。

吉川英一